イスラム建築を彩る美（3）

桝屋　友子

鑑賞術

地域ごとに多様な技法

壁面に光沢・色・図案を与えるタイル

表の面に釉薬をかけて焼いた陶器の板、タイルはイスラム地域のほぼ全域で建築装飾として用いられた。タイル装飾は最も有名なイスラム建築装飾法と言えるだろう。建物の表面に張ることによって、光沢、色彩、図案のある壁面を演出することができる。当然ながら、タイルはその時代や地域の陶器の発展・流行を反映する。器を作る陶工がタイルも製作するため、技法や彩画が両者に共通することも多いからだ。

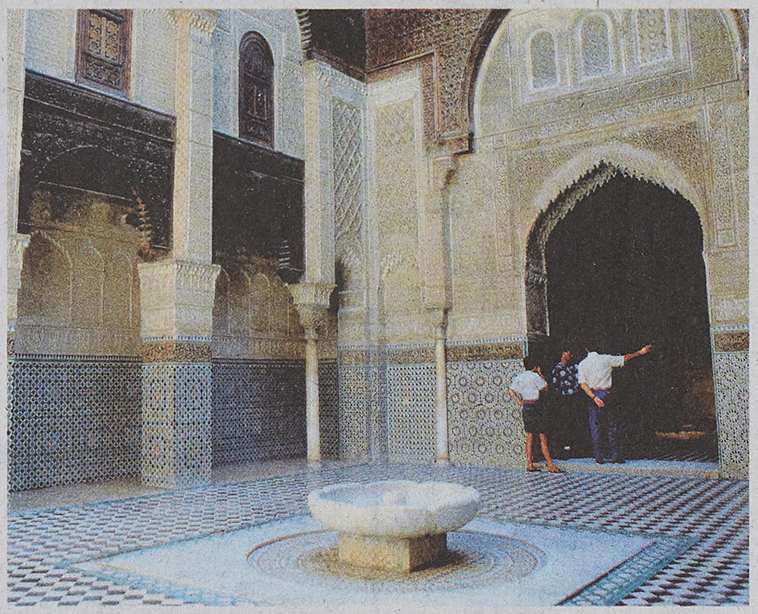
これまで見てきた施釉煉瓦やアブラクと違い、建物から剝がすことが可能なタイルは、世界の美術館にも展示されている。しかし、それらがかつてどの建物を飾っていたのかという由来が知られているものは少ない。まずは数多くのタイルのうち、どれが同じセットに属していたかを、筆者を含め、国際的に共同で研究を進めているところだ。タイルは形も色も、その陶芸上の技法も、組み合わせ技法も実に多種多様だが、現在でも建物に残っている例を2つだけ紹介する。

芳しい幾何学文様

北アフリカやスペインで見られるのがゼッリージュと呼ばれるタイル装飾。型で特定の図形に作られ、決められた色の釉薬が施された個々のタイル片がモザイク状に壁面で組み合わされて、連続幾何学文様を構成する。スペインのアルハンブラ宮殿で見覚えのある方もいらっしゃるだろう。

同一文化圏を形成していた、地中海対岸のモロッコでも広く使われている。世界遺産、フェズ旧市街の迷路のような街路に点在する寄宿制宗教学校の一つ、アッターリーン・マドラサでは、緻密に浮彫された木材、石材、漆喰に、タイルが華やかな彩りを加えている。

壁面の下部と大理石の水盤を取り囲む床がタイルで覆われるが、壁タイルは位置によって図案が異なり、均一性を敢えて破る。香水・香辛料市場に近いため、アッターリーン（香水商）の名がある、内装も名前も芳しい学校だ。



アッターリーン・マドラサのゼッリージュ装飾（14世紀、モロッコ・フェズ）＝筆者撮影

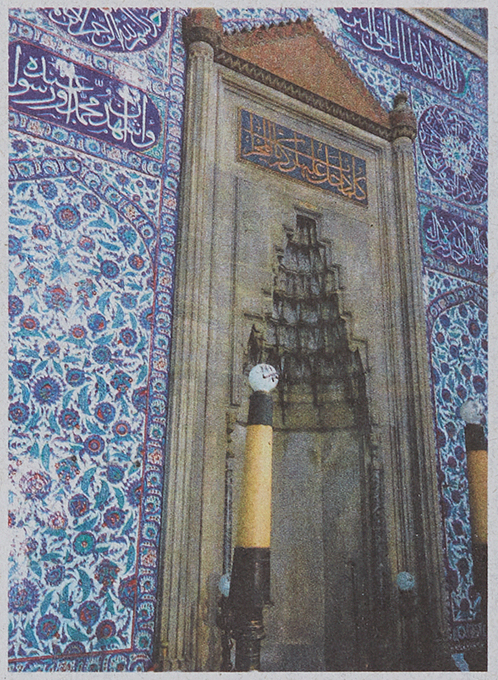
花が満たす壁面

13世紀末から20世紀まで続いたオスマン帝国の首都イスタンブールでは、モスクや宮殿がタイルで飾られた。タイルが作られたのは、アナトリア半島北西部の都市イズニク（古代のニカイア）で、当時の陶器生産の中心地だった。絵付けをしてからその上に透明な釉薬をかける釉下彩技法が使われ、筆による自由な描画と多色の着彩が可能だったうえ、16世紀にはイスラム地域の陶器でなかなか実現できなかった赤色の開発に成功し、画題の幅が広がった。とりわけ、花に赤を配色できるようになったことが大きな収穫で、花が陶器の彩画の主役となり、タイルもその傾向を反映した。

名建築家スィナン設計のソコルル・メフメト・パシャ・モスクは、最盛期のイズニク・タイルで飾られたモスクの一つ。1枚のタイルは基本的には正方形で、覆うべき壁面に合わせてセットで図柄が描きこまれ、設置の際は絵が繋がるように並べられている。

ここでは、礼拝の方向にある最も重要な壁の大部分がタイルで覆われた。美しい書に加えてタイルを満たすのは丁寧に描かれた架空の華麗な植物で、白地に赤、青、緑が鮮やかだ。画力と色彩が文字通り壁に花を添える。

（東京大学教授）



ソコルル・メフメト・パシャ・モスク、ミフラーブ横のイズニク・タイル装飾（16世紀、イスタンブール）＝筆者撮影